

## パネルディスカッション『今こそチャンスは地方にある！ ～地方の魅力って何だろう～』

Q.今回のワークショップを通して、学生の皆さんは北九州のこと、SDGsのことを身近に感じたかと思います。何か新たな気づきはありましたか？



明治大学・赤峰 美彩さん

**明治・赤峰 美彩さん**：北九州には特産品や観光地を生かしたスイーツが多いと感じました。なので、既に完成された（ものがある）スイーツを考えるのはとても難しかったです。SDGsに関しては、例えばフードロスの場合消費者側は好き嫌いをなくす、最後まで食べるということが挙げられますが、売る側からのアプローチも、イチジクの皮を最後まで使う、見栄えの悪いフルーツはジャムやお茶にするなど、たくさんあることに気づきました。

**中央・杉山 周政さん**：イベントに参加する前は、北九州は工場都市で煙がモクモクと出ているイメージでした。しかし北九州市立大の人と話して、自然が豊かで美味しいものもたくさんあって、本州と九州の文化が交わっているととても魅力的な都市だと感じました。夜景が美しいのも、環境問題に積極的に取り組んだ成果だと思っています。

**日大・佐野 冬馬さん**：今回参加して、自分が生まれたところには何があるんだろうと改めて考え、地元のことを調べてみると、これまで知らなかった側面に気づくことができました。地方を知ることは、自分の地元を知るきっかけにもなるのだと思いました。

**北九州市立大・下田さん**：今回はアドバイザーという立場でみんなに情報を提供しました。ふんだん自分たちが気にも留めていないことについて質問を受け、それに対して自分たちが調べる、ということを繰り返し、北九州市の魅力が改めて知るきっかけになりました。

—学生さんのコメントを受け、アドバイザーの杉野さんから一言お願いします。

アドバイザー・杉野 重人さん：北九州について積極的に興味を持ってくれたことを非常に嬉しく思いました。自分も北九州出身ではないですが、北九州に引き寄せられて活動しています。北九州は「交わる場所」「行きかう街」だと感じていて、日々進化するので飽きません。今回のイベントをきっかけに地元を含めていろんな街に興味を持ってもらいたいと思います。

—内田先生からもアドバイスをお願いします。

北九州市立大・内田 晃教授：今回、2年生12名のゼミ生が参加しました。50名以上の東京の大学生が北九州のことを真剣に考えてくれたことに意義があったと考えます。ゼミ生にとっても、改めて北九州のことをみんなに伝えるという使命をもって、自分で考えたことが財産になったのではと思います。

Q.ポストコロナ時代、ワーケーションやテレワークなどの導入で働き方が変わってきており、最近では、移住も含め、地方で働いたり、暮らしたりすることに注目が集まっています。皆さんは、地方都市である北九州の魅力、可能性についてどう感じますか？



日本大学・佐野 冬馬さん

日大・佐野 冬馬さん：北九州は魅力がたくさんあるので、いろんなチャンスがありそうな気がしました。住むことを考えると、エリアごとに特徴があることが非常に興味深かったです。

明治・赤峰 美彩さん：北九州は起業や移住に向いてそうだと感じました。東京だと横のつながりも少ないし生活の幸福度も少なそうですが、北九州で暮らすことで自分の生活を豊かにしたり起業について考えたりするのもいいんじゃないかと思いました。

中央・杉山 周政さん：博多まで約15分で行けますし、韓国や台湾などにも近く、アクセスの良い街だと思いました。

—杉野さんからコメントがありましたらお願いします。



アドバイザー・杉野重人さん

アドバイザー・杉野 重人さん：地方で働くということは可能性が広がるということです。起業したい、働きたい人にとってはちょうどいいサイズの街じゃないでしょうか。

—内田先生は今回参加した首都圏の学生にどのようなことを伝えたいでしょうか。

北九州市立大・内田 晃教授：我々の世代は北九州にいいイメージを持っていない人が多いのですが、今回の学生さんは高く評価してくださいました。しかし現実的には人口が減少しています。2020年の国勢調査では、5年前に比べると21000人減っていて、毎日12人ずつ減っている計算になります。人口減の主な原因は若者の流出とされているので、北九州市立大でも、いかに卒業生を北九州にとどめるかいろいろと悩んでいるところです。

出ていく人は仕方ないけど、逆に縁もゆかりもない人に北九州に住んでもらったり、定年退職した方に住んでもらったりするのもありなのかなと思っています。北九州市はスタートアップ支援とか定年後の移住定住サポート、企業誘致などいろいろと取り組んでいます。

コロナ禍により働き方が変わり、テレワークのポテンシャルを大いに引き出しました。コロナ禍による悪いところばかりではなく、新しい側面もプラスに変えなければと思います。北九州は物価も安く通勤時間も短いのでQOL（クオリティオブライフ）が高いんじゃないかと思っています。そういうところを打ち出して北九州の魅力を伝えていきたいですね。

Q.地方と繋がることの重要性について発言がありましたが、今回このワークショップに参加された皆さんは、今後北九州とどのように繋がって行きたいと思いますか？



中央大学・杉山 周政さん

中央・杉山 周政さん：街の魅力が、行ってみないと気づけないものだと思います。ぜひチームのメンバーで北九州に訪問して、今回の開発されるスイーツを食べたりして、街の魅力を体感したいです。

日大・佐野 冬馬さん：ホテルなどではなく、地域に密着した宿泊スタイルで北九州に行ってみたいと思っています。

明治・赤峰 美彩さん：これを機に実際に北九州に行ってみたいと思いました。美味しいものを食べたりして魅力を体感してみたいし、ふるさと納税で特産品を購入するなどの形でも北九州とつながっていきたいと思います。

北九州市立大・古賀 成晃さん：各チームのプレゼンテーションの中で北九州のたくさんの魅力が出てきました。今回は地方のことを知る、そしてつながるきっかけになったのではないかと思います。北九州は、自然も歴史もあって、でも今どきのおしゃれなこともできます。今回のイベントがきっかけで、北九州を旅行先に選んでもらったり、北九州で働いたり住んだりすることにつながればと考えています。

—杉野さんからアドバイスがありましたらお願いします。

アドバイザー・杉野 重人さん：政令指定都市であるにもかかわらず、この規模のイベントを実現できるのが北九州の魅力だと思います。北九州が可能性のある街であることは、入り込んでもらえるとよく分かります。

—内田先生、総括をお願いします。



北九州市立大・内田 晃教授

北九州市立大・内田 晃教授：北九州市立大学の地域創生学群は地域で活躍する人材を育てる学部ですが、首都圏の学生との取り組みは初めてだと思います。今回参加した東京の学生さんは、ぜひ今後も北九州に関わってほしいと思います。有楽町にある北九州東京事務所で北九州を感じることができるので、フラッと寄ってください。

内田ゼミとしてもこれでこのイベントを終わりにしたくないと考えているので、来夏オープンゼミのようなことを計画したいと思います。そのときはぜひ参加してください。

--そのほか、今回のイベントで感じたことがある方はいらっしゃいますか？

東京栄養食糧専門学校・山本 麻紗子さん：貴重な体験ができました。各グループが北九州の魅力を伝えるスイーツを考案している姿をみて、学ぶところが多かったです。北九州の食文化や歴史のエッセンスを商品に入れるのは難しいと感じましたが、中には面白いアイデアもあり参考になりました。

もし私が今後ある地域で食品開発をするとしたら、地元の食材や特産品を使い、街のPRができる商品を開発したいと思いました。食文化や伝統の継承ができ、その土地の魅力を感じられる商品が提供できたら街がにぎわって魅力的な場所になるのではないのでしょうか。

明治・守屋 沙弥香さん：今回、何人かで集まることでいろんな意見がでて、それが積み重なって素晴らしいものができたので、大学生の「可能性」を実感しました。商品開発にあたって難しい部分もありましたが、その難しさを克服できるような力を身につけたいと思いました。

中央・華垣 恭さん：今回の企画において、自分たちで商品の考案からPRまでトータルで考えたことで、自分たちの身の回りにある商品にも多くの人が携わっていることを初めて実感することができました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。